

京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景 (2-1)

— 白磁分類への問題提起 —

赤松 佳奈

はじめに

11～12世紀は、平安時代から江戸時代の中で、輸入陶磁器が京都に最も多く搬入された時期といえる。例として、輸入陶磁器の時期別出土点数を数えた二つの調査(HKHW, NNS)を示すと、当該期の資料が占める割合はそれぞれ42%, 50%であった(図1)。

当該期の土師器に伴って出土する輸入陶磁器には以下の種類がある。

白磁：碗，皿，壺，水注，合子

青白磁¹⁾：碗，皿，合子，小壺，壺，水注

青磁：碗，皿

その他：黄釉褐彩盤，三彩系陶器，無釉
あるいは灰釉の粗製陶磁器類

このうち80%以上が白磁である。

11～12世紀，特に12世紀の白磁の出土量が多いことは，全国的な現象であり，京都市内からも膨大な量の白磁が出土する。このため網羅的な集成はしていない。様相を理解することを目的として，共伴する土師器皿から廃棄時期が推定できる資料を中心に出土例を収集し，主体となる器形の種類，割合と型式変化を考察する。

2-1とした今回は白磁に的を絞って考察する。多量であることが理由の一つだが，大宰府分類(横田・森田1978，山本2000)²⁾が埋蔵文化財調査関係者に広く

浸透して数十年が経ち，同じ基準による分類の蓄積とそれぞれの地域が持つ出土様相のイメージが出来ている。これに対して，京都市出土資料を枠組みから新たに整理し，これまでの研究と比較し見えた問題点を提起することを重要視したためである。

京都の出土様相

青磁から白磁へ

9・10世紀代には，青磁が最も出土量の多い器種だった。その青磁が全体量の1%にも満たず総出土数の80%以上が白磁という様相に替わるのは京都では11世紀である。前回まとめたように10世紀になると白磁の割合が増えるが，青磁の量が極端に少なくなるわけではない。ところが，11

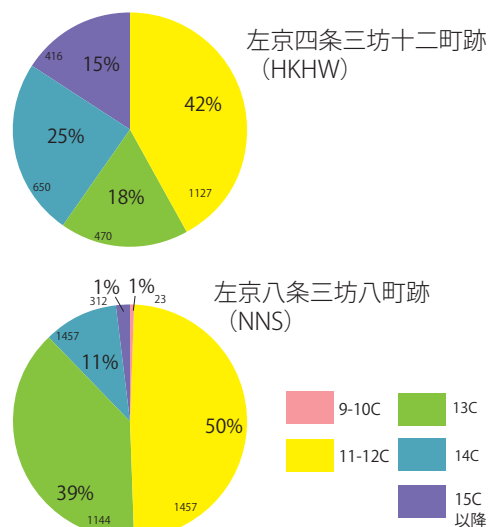


図1 時期別の破片数

世紀前半にあたる4A段階（1020-1050）には白磁の出土割合が90%以上となる。4A段階は出土量そのものが少なく現時点では未詳な部分も多いが、11世紀前半から中葉の白磁供膳具には輪花碗・同皿、外面に蓮弁文を持つ碗などの古代的な様式を持つものと11世紀後半から12世紀にかけて主体となる玉縁状口縁碗（以下玉縁碗）、口縁部が素直に丸くなる直口碗（以下直口碗）、口径10cm前後の皿などの器形が混在して出土する。

できるだけ大きな分類基準で11世紀中頃以降の白磁を整理すると、玉縁碗2種類・直口碗2種類・皿2種類と四耳壺・水注が出土器形の大部分を占めていた。なお壺は図化されている資料が少ないが、破片では全体の10%程度を占める（図2）。

群と器形

11世紀中頃から12世紀中葉まで、主要な器形として圧倒的多数を占める玉縁碗2種類・直口碗2種類・皿2種類をさらに分析すると、胎土・釉調・形態の類似性から2つのグループに分かれた。

群別で最初に注意した基準は胎土で、仮

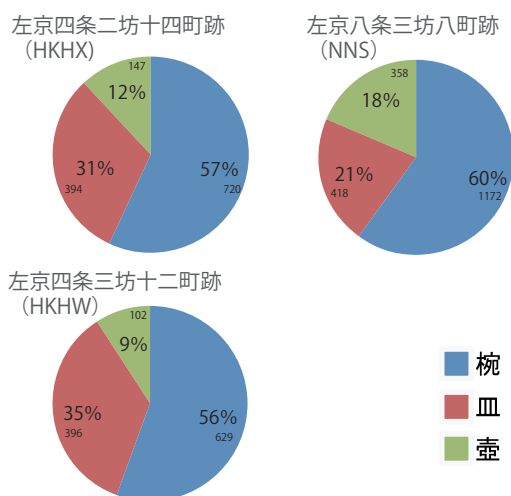


図2 出土白磁の碗・皿・壺の比率

に、土は精緻だが断面がざらついた感じを受けやや黄みを帯びた胎土のグループをN群、粗砂が少量混じるが断面がなめらかな印象で白色の胎土のグループをY群とする。N群の色調は白色から黄色で時期が下がると黄色くなる傾向にある。釉の透明度は低い。Y群は色調がおおむね白色で状態が良ければ釉の透明度は高い。胎土・釉調を基準に分けたこの2群は、体部内面成形時のコテの当て方にもそれぞれ特徴があり、N群は底部から体部全体にコテをあて丸く仕上げる（口縁部付近までコテが当たることが多い）。Y群は体部は挽きあげた状態で口縁部付近を比較的広くナデ、底部内面にコテをあてることが多い³⁾。それぞれ

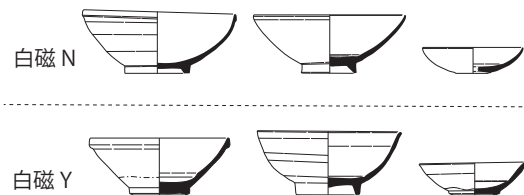


図3 出土白磁の2群と主要な器形

中国時代区分	時代区分	土師器の段階区分と略年代
五代 960— 宋 1115金 1127南宋	平安時代	3 A 930
		B 960
		C 990
		4 A 1020
		B 1050
		C 1080
		5 A 1110
		B 1140
		C 1170
	鎌倉時代	6 A 1200
		B 1230

図4 京都出土土師器の時期区分と年代観
平尾2019を引用・追記

器形の種類は少ないと捉えられ、こうした変化が起こる11世紀前半は輸入陶磁史上の画期と評価できる。

当該期の出土資料がこれほどシンプルな構成だと気づいたのは分類を繰り返した後で、最初はまだもっと複雑な様相を想定していた。筆者がそう感じた要因の一つは、おそらく産地が異なる⁵⁾N・Y群の白磁が混雑して出土し、用途によって識別できなかったからだと考えられる。

また、この2群3器形は基本の形を維持

しつつも、輪花意匠の付加や体部・口縁端部の形・反り方、文様の有無などによるバリエーション(図5・6)を持つ。

用途に規定されない選択肢、現代的に言えば販売元との関係・趣向・価格といった要因により選択された様々な組み合わせにより複雑な印象をもっていたのである。

以上をまとめると、11世紀の中頃以降12世紀後半までの輸入陶磁器は、大多数が白磁で、器形の種類は少ない。決まった形の碗・皿が型式変化しながら主体をな

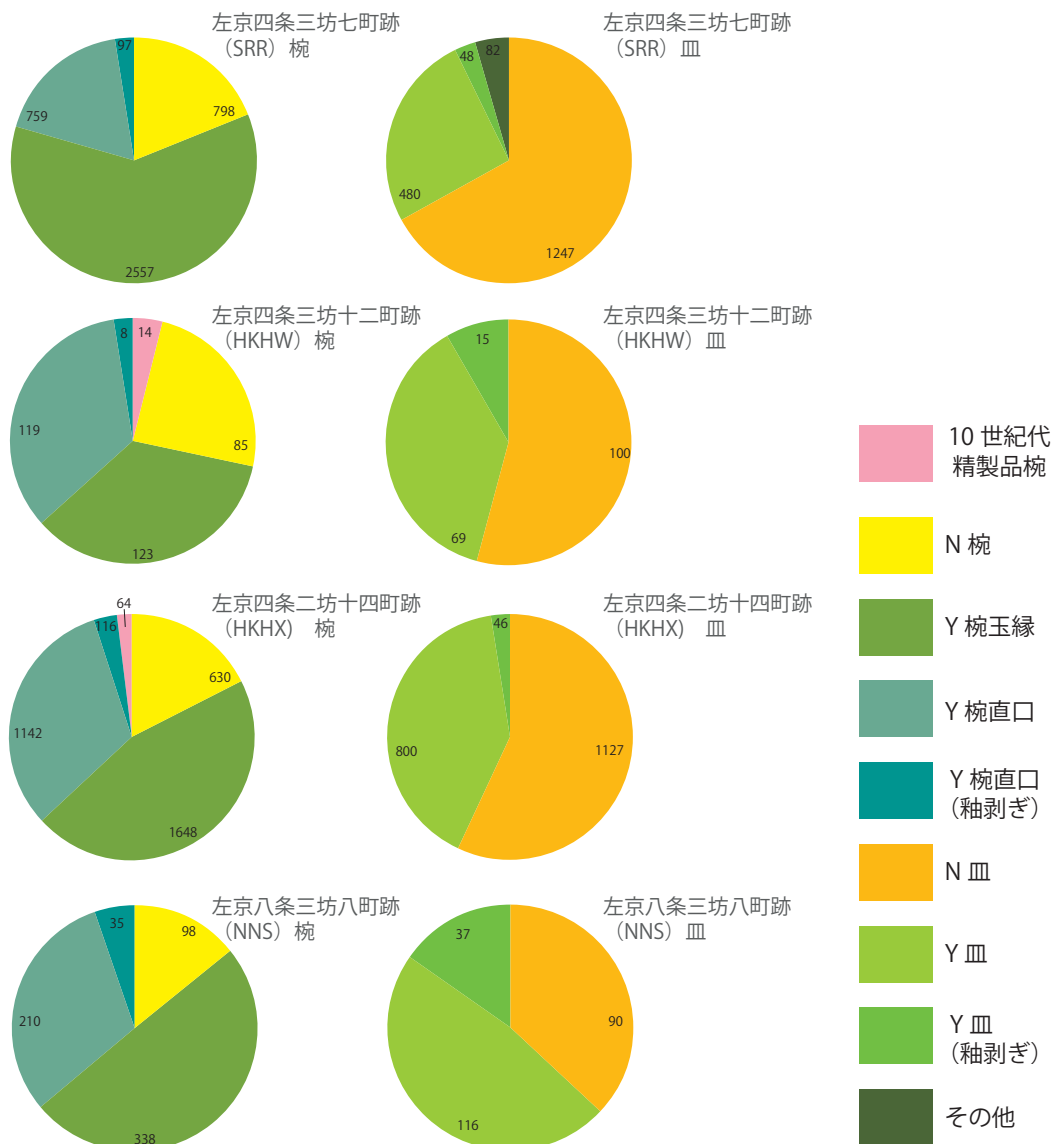


図7 器形の比率

し、12世紀の後半には新たな器形を加え、12世紀末から13世紀になると青磁碗に主体の座を奪われる、という流れが当該器の輸入陶磁器供膳具の様相変化として説明できる。なお、12世紀中頃以降は白磁だけではなく青白磁や黄釉褐彩盤が一定量を保ちはじめ、器種器形が多様化の方向に進む。

各器形の量

次にこの2群3器形がどのような割合で出土するかについて考察する。白磁N群の直口碗は数が少なく、破片資料では多くても全数量の1%に満たないためここでは除外する。今回は試みとして、一回の調査で出土した輸入陶磁器片を全て集めた4箇所の資料⁶⁾の統計を提示する(図7)。

数えた白磁片は全部で約23,400片でそのうち器形の分かる約13,000片を分類した。遺跡の性格やピークの時期によって比率に差はあるが、おおむね類似した傾向が出た。

碗は白磁Y群の玉縁碗が最も多い。比率が最も少なかったHKHWでは35%、最も多いSRRでは61%であった。次にY群の直口碗が多く、碗はY群が主体を占める。ただし群にかかわらず器形で分ければ玉縁碗

が多い。少なくても59%、多い場合は80%であった。

皿は、NNSを除く3遺跡でN群が最多であった。HKHWでは54%、SRRでは67%にのぼる。時期のわかる土師器皿共伴資料ではN群の皿は11世紀代に多く、12世紀後半以降になると少なくなる。12世紀後半はY群の皿の方が出土量が多くなる傾向にあるので、遺跡のピークが12世紀末から13世紀前葉にあるNNSではY群の皿の比率が高い。

全体の様相ではHKHW、HKHXが近似した比率となった。この2箇所は中世京都の中心的な商工業域である左京四条二・三坊界隈の調査で、当該期の京都の代表的な様相と言っても過言では無い。

各時期の様相

10世紀末～11世紀前半(3C・4A段階)

10世紀末から11世紀前半の白磁は様相が不明瞭である。不明瞭な理由は出土量が少ないことに起因するが、それだけではなく白磁の器形が不安定なことにもある。越窯系青磁の蛇の目高台碗や定窯系白磁の玉縁碗のような安定的な器形が見えず、先述した11世紀中頃以降の定型化した碗はま

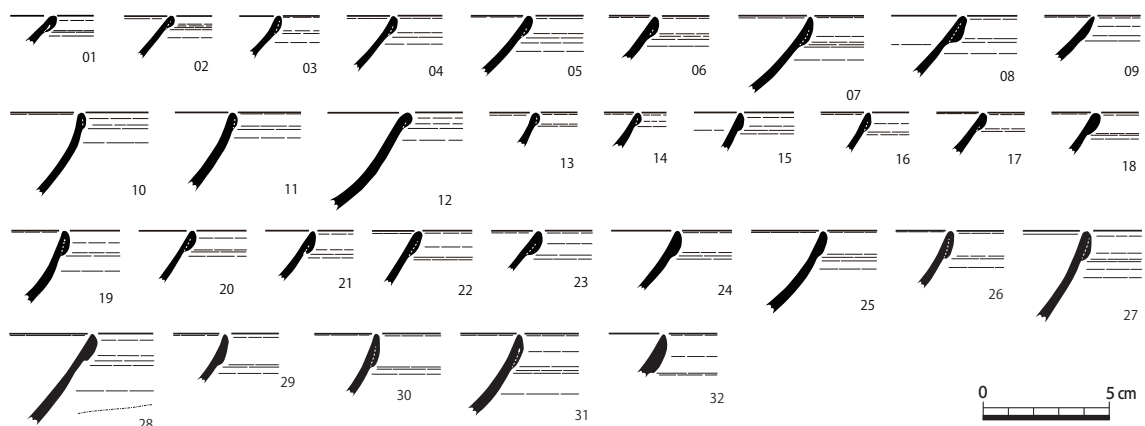


図8 10世紀末から11世紀前半の白磁碗玉縁形状の個体差 (HKHX出土資料1:3)

だ出土しない。ただし、基本的な形態は両者の中間的な様相で胎土や釉薬が精良なものが多い。北方系・南方系の両者がある。玉縁碗が多数を占める器形で大小様々な法量がある。南方系白磁の玉縁部の形状やコテの当て方は白磁N群に近いが、肉眼観察では11世紀初頭のものとは11世紀中頃以降のものを直接的に繋ぐ決定的な根拠を見つけれなかった。胎土は精緻で釉薬は薄い透明感のあるものも多い。色調は白色でやや青みがかったものもあればやや黄みがかったものもある。器形の種類を問わず器壁は薄く丁寧な作られていることが多い。口縁端部の形状は個体差が大きい(図8)。

この不安定で過渡期的な様相は、宋・遼が軍事的緊張状態にあった東アジアの政情⁷⁾や、中国で磁器生産が拡大し多くの地方窯で大規模な生産が行われ始めた様相の一端⁸⁾を示している可能性がある。また、日本側も宋・高麗に警戒感を示していた時期⁹⁾であり、具体的な貿易相手との関係、仲介人、パトロンといった対外貿易の構造や利権に変化があった可能性もある。不明瞭なことをむしろ当該期の状況として評価す

べきかもしれない。

11世紀後半(4B・4C段階)

4B段階(1050-1080)は量はそれほど多くないが白磁N・Y群の主要な器形は揃っている。N群の碗は時期が下がると色調が黄色くなる傾向にあるがこの段階のものは白色で仕上がりが比較的精良である。Y群の玉縁碗は玉縁が小さい。底部内面に段を持つものと持たないものがある。直口碗は体部が丸く口縁部に向けて真っ直ぐに立ち上がるか口縁端部下端のナデによってくの字状に折れる。この段階では強く外に反るものを見ない。また貫入が多く入り、胎土は褐色や黄色に近いものが目につく。12世紀代の口縁部が外反するY群直口碗に直接的に繋がるか疑問を覚えたが肉眼観察では決めてに欠ける¹⁰⁾。N・Y群にかかわらず花文などが描かれる碗・皿の文様は図形が崩れておらず丁寧である。他に器壁の薄い精製品で外面に蓮弁が彫られた碗が数点出土している。類例によると器形は斜め方向に伸びる輪高台の碗(ⅢB1)である。

4C段階(1080-1110)は出土量が多く当該期を代表する様相と評価できる。11世紀的な要素が安定した時期でN・Y群の基本器形に様々なバリエーションが見出される。Y群の玉縁碗はまだ玉縁が小さく底部内面に段を有するものと段の無いものがある。直口碗は端部が外反するようになる。皿は同一のデザインで複数法量のものが出土する。精製品は青白磁につながる器壁の薄い碗・皿が出土し始める。ただし色調はやや黄みがかった白色である。

12世紀(5A・B, 6A段階)

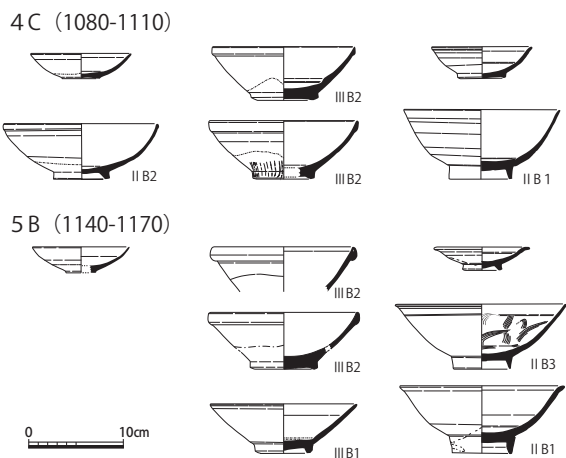


図9 白11世紀と12世紀の様相差(1:8)

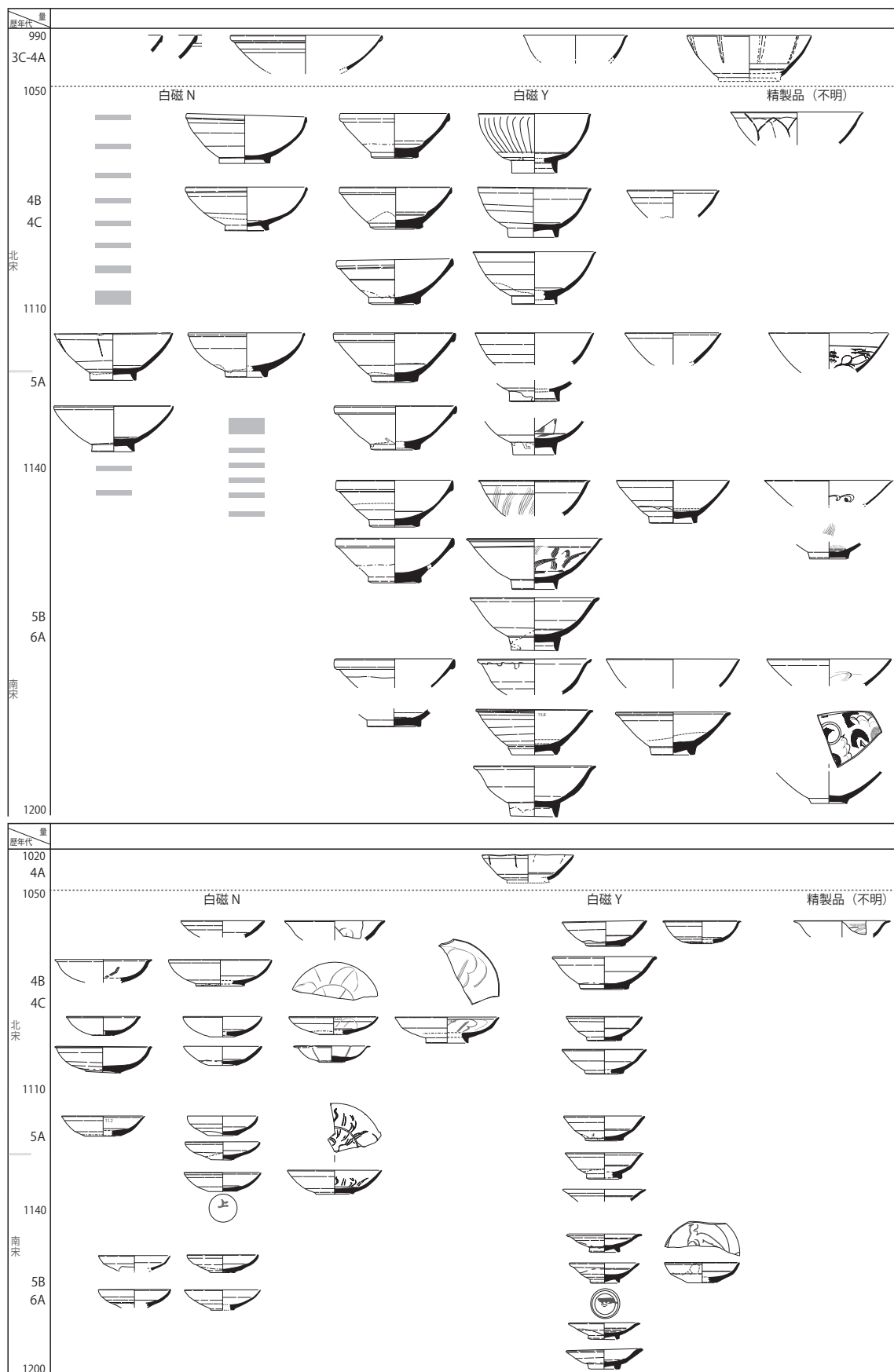


図10 白磁碗・皿の変化と廃棄年代 (1:8)

12世紀を代表する様相は5B段階の様相(図9・10)で、5A段階は4C的な要素と5B的な要素が混ざる過渡期的な様相を示している。N群の碗は5A段階には比較的出土量が多いが5B段階には減る。底部内面に段のつくY群玉縁碗は段が沈線となる。4C段階の新しい様相には沈線のもの少量あるので12世紀の前後で段から沈線に変化したと推測される。以後沈線のあるものと無いものが併存する。

先述のとおり5B段階は型式変化による器形の変化が安定して、12世紀を代表する様相を呈している。N群の碗は減るが皿はこの段階でも出土量が多い。N群の皿は時期が下がると底径が小さくなるが底部内面(見込み)が大きくなり体部が短くなる。Y群の玉縁碗は玉縁部が大きくなる。直口碗は口縁部が強く外反するもの(ⅡB1)と端部のみ外に折れるもの(ⅡB3, 以下口折碗と仮称)が現れる。Y群の皿は器高が低くなる。またY群の碗に体部が斜めに直線的に伸びる碗(碗ⅢB1)が新たな器形として加わる。この碗は底部内面を環状に釉剥ぎする。以後6A段階にむけて出土量を増やし、6A段階には内面を環状釉剥ぎするY群の口折碗(ⅡB3)とともに出土白磁碗の主流の器形となる。

6A段階の全体的な考察は次回2-2に予定している。

精製品について

全体の比率では3%にも満たないが、精製品の碗は全時期を通じて少量出土する。11世紀代は外面に連弁文をもつ碗、12世紀代には青白磁碗につながる器壁が薄く釉葉の透明度が高い碗が目立つ。また5A段

階に1点だが、印花文の北方系白磁碗が出土している(図18)。5B段階になると青白磁の碗が一定量出土するようになる。青白磁を含む他器種については次回考察する。これら精製品の碗は現在のところ全て体部が斜め方向直線的に伸びる碗(ⅢB1)である。斗笠碗と呼ばれるこの器形は型式学的には越州窯系蛇の目高台碗につながる。中国では、宣化遼墓¹¹⁾の「備茶図」と呼ばれる壁画に描かれており、用途は「茶盞」と推測される。

5B段階である12世紀後半になると、大量生産品である底部内面釉剥ぎの白磁Y群碗ⅢB1が増え始める。精製品では青白磁の碗ⅢB1が一定量あり、同時期の遺構から黒釉の碗が出土している。これらは一連の動きと考えられる。

壺類

壺類には壺・水注がある。四耳壺と胴部瓜形の水注が多い。単体か細片で出土する事例が多く、時期ごとの型式変化を考察することができなかった。将来の課題としたい。四耳壺は時期が下がると肩の張りが弱くなり、底部が厚くなる傾向にある。

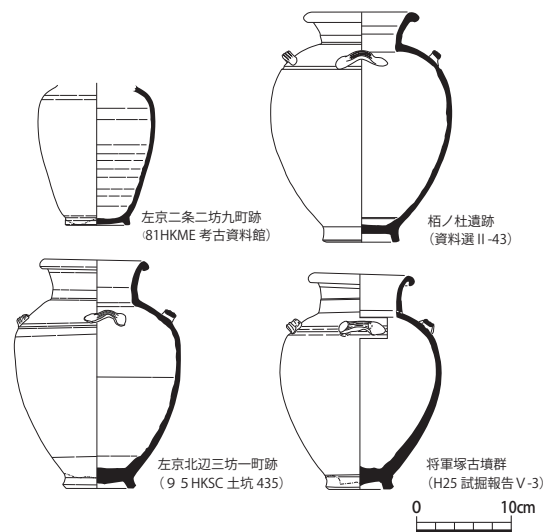


図11 壺の出土例

大宰府分類の問題点

横田賢次郎氏・森田勉氏は「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として」において「分類の基準ないし方法について記すと、白磁の規定については最初に述べた一般的な概念に従い、胎土、釉調に注意することは当然であるが、特にここでは、器形の違い、とくに底部（高台部）の変化をみることによって、分類の基本とした。」とする。この分類を引き継いだ山本信夫氏¹²⁾は「分類基準として、個、類、群の系列関係が重要視されており、未分類の新出資料に対しても系列拡張が可能なように配慮されている。この分類法は文様など美術的視点よりも器形、手法、胎土、施釉法、焼成方法などに判断の優位性を求めたものである（註2）。これらの点は器形に集約される。まず大分類・器形特に高台形（Ⅰ～Ⅺ類に記号化）、中分類・器形の若干の違い（1、2……に記号化）、小分類・文様の有無及び文様差（a、b……に記号化）という分類基準軸が示された。」と書いている。大宰府分類の基準は高台形で、椀における類区分は有用性が高く、早くに整理されたこともあって出土輸入陶磁器分類としては最も広く使われている。ただし、広く使われているのは椀に限ってである。なぜなら白磁の皿は高台形を基準として類区分がされていない。このため、今日的視点で見れば型式組列の前後にくる器形が別々の類（例えば皿Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類）に区分されており、理解することが難しいためか、報告書でも記述をあまり目にしない。椀はある程度有用性があると述

べたが、椀分類にも同様の矛盾がある。

大宰府分類の問題点その1は、高台形を分類の基準としながら、高台形とは異なる基準で区分された類が含まれ、構造に矛盾が生じている点である。

その最も大きな問題が椀Ⅷ類で、Ⅷ類は「内定見込みの釉を輪状にカキ取ったものである。」と書かれている¹³⁾。見込みの環状釉剥ぎは焼成のための技法であり、高台形とは無関係である。図12の椀Ⅴ-4aとⅧ-1は「内定見込みの釉を輪状にカキ取った」ことを除けば同じ器形である。両者には多少の時間差があるためⅧ類の方が高台が低く方形になっているが、この程度の差はⅤ類の中に散見される。Ⅷ類とされる6A段階の口折椀には内面全面施釉のもの、環状釉剥ぎのもの、内面下半部無釉のものがある。しかし類似の形態をしている。釉剥ぎ技法を基準としたためⅧ類には、Ⅷ-0、Ⅷ-2、Ⅷ-4など、そもそもⅤ類とは組列が異なる器形が同じ類に分類されている。Ⅷ-2は12世紀後半から増える器形で、日本が輸入を求める器形がこの段階に変わってきていることを示す重要な資料だが、Ⅷ類に入れられたことによって、存在があまり認識されていない。

問題点2は、筆者のいう群別と器形の関係が大宰府分類では異なる階層として提示されている点である。

筆者が分類した白磁Ⅳ群は大宰府分類では椀Ⅱ類、Ⅳ群は椀Ⅳ・Ⅴ類に該当する。椀Ⅱ-1は玉縁状口縁椀、椀Ⅱ-4は直口椀である。高台形状は削り出し技法が同じためよく似ているが、実物資料は高さや細さが異なる。高台形を基準にすれば分類とし

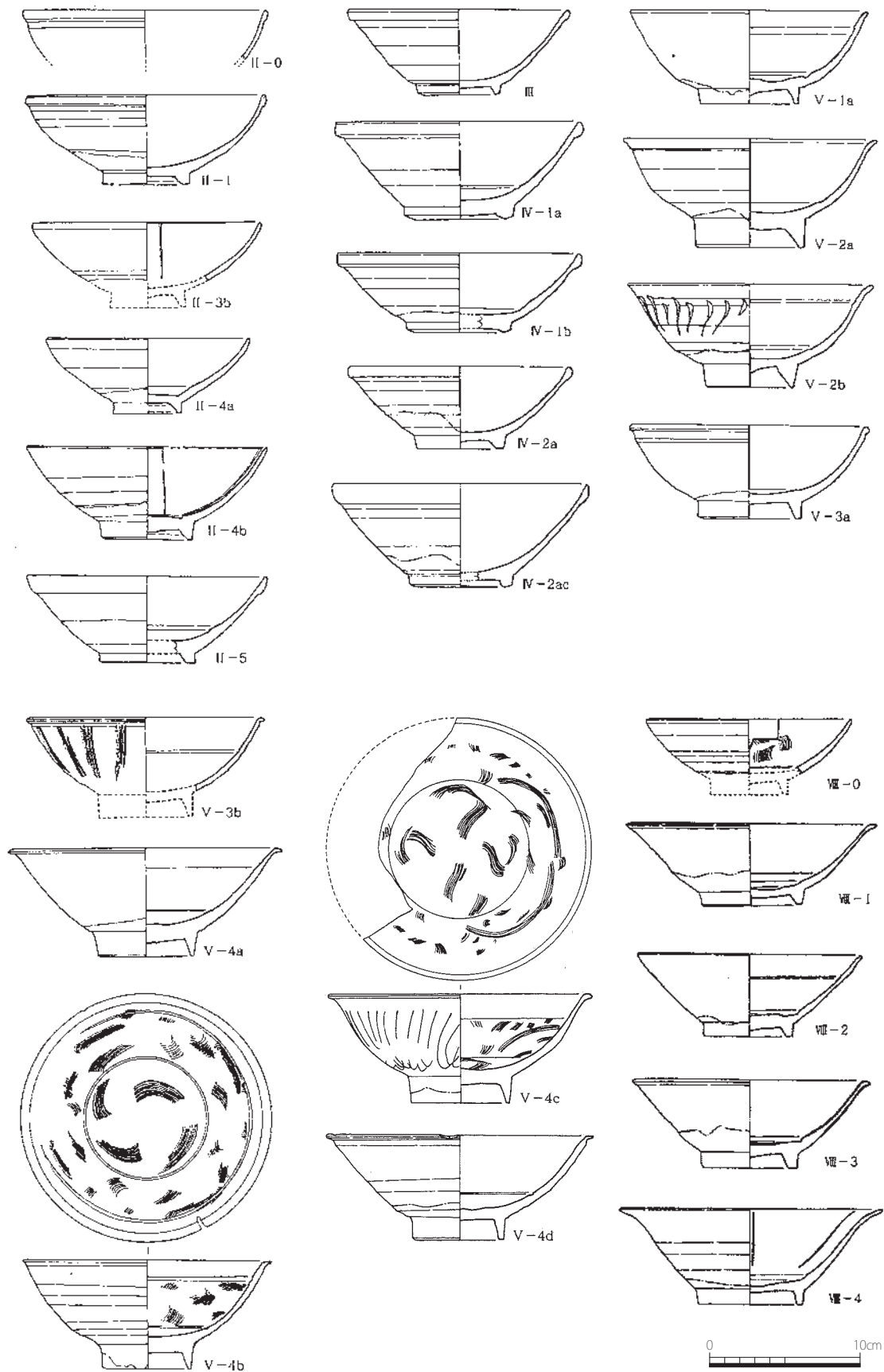


図12 大宰府の碗の分類 (1:4) (『大宰府条坊XV』より引用)

ては妥当の範疇だが、一方でⅣ・Ⅴ類として2種の「類」に分けた器形の違いが、Ⅱ類では同じ類の細分項目になってしまった。階層が様々で、より大きな異なる群別とその中の種類が明確ではなくなった。

時間の経過によって形が変わる器を何かの記号で分類することには多少の無理が伴う。その点は山本氏も「いったん記号化すると硬化した方法となり、新出資料がそれまでの系統的記号法になじまない場合が生じてくる。」と苦慮されている。分類は資料整理の基本だが、全てに完璧に当てはまるものを作ることはできない。そのため分類は構造的である必要がある¹⁴⁾。構造矛盾は大きな欠点と言える。

しかし出土輸入陶磁器の理解にとって分類記号よりも大切なのは、全体の様相であり、一括資料のセット関係である。また、器は日常的な道具である。我々は器を使用する際に、法量やデザインより口縁端部の些細な違いや高台の削り方を重視するのだろうか。大宰府分類の通りに分けて満足してきた在り方を見直す時期が来ている。

まとめにかえて

白磁碗の分類と理解は大宰府分類に長く牽引されてきた。この功績は大きいが弊害もある。そのうちの最も重要なものは、「白磁碗にも型式変化がある」ということが忘れられてしまった点である。白磁碗が輸入陶磁器の大半を占める時期は150年以上ある。京都の土師器皿編年では5段階以上の時間で、当然、物の形は変化する。とく

に磁器食膳具は生産地中国では最も日常的な食器類であり、比較的型式変化が起こりやすい器形と捉えるべきものである。

我々はどうしてか「古い方が良い」バイアスを持っている。12世紀後半に位置付けられる白磁が11世紀後半とされている事例が散見される。しかし、11世紀後半から12世紀は武士が台頭し世の中が変わる変動期である。11世紀後半なのか12世紀後半なのか。地域がどの時期に繁栄を迎えたかは、その地域の勢力構造を考える上で欠かせない問題で、次に続く中世史を理解する基盤にもなる。その集合知は地域の問題だけでなく、日本史上の問題を明らかにするはずである。

最後に、京都出土輸入陶磁器の整理に着手する切っ掛けとなったのは当該期の遺物であった。破片を分け始めた当初、大宰府分類にお世話になった。本稿執筆までに5年以上かかり、その間に何度も分類を繰り返した。その材料は、吉川義彦氏と平尾政幸氏が遺物整理時に全ての出土破片を集めたコンテナである。お二人の問題意識が本稿の原点である。

執筆にあたっては下記の方々にお世話になった。(敬称略、五十音順)

上村和直、大立目一、尾野善裕、児玉光代、佐藤隆、高橋潔、新田和央、平尾政幸、水橋公恵、村野正景、吉川義彦、発掘調査報告書の執筆者皆様

平尾氏・京都市埋蔵文化財研究所に一部の図データの提供をいただいた。

※本稿の土師器の年代観は平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第12号公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2019による。

あかまつ かな
赤松 佳奈 (文化財保護課 文化財保護技師 (埋蔵文化財担当))

- 1) 青白磁は白磁の一種だが器形の構成が異なるので器種として独立させて考える。
- 2) 本稿での「大宰府分類」とは次の2本に発表された分類を示す。①横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」－型式分類と編年を中心として－『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館1978, ②山本信夫『大宰府条坊跡XV』－陶磁器分類編－大宰府市の文化財 第49集 大宰府市教育委員会2000
- 3) 便宜上それぞれの群のイメージを平均化して記した。色調や透明度は窯内の温度や酸素量で簡単に変化する。形態の類似性が有効であった。
- 4) 現代日本社会には「うどん鉢」「ラーメンどんぶり」「コーヒークップ」「ティーカップ」など特定の形を示す用語があるが形態は千差万別で考古学的手法で分類すると煩瑣な記号を必要とする。しかし日常生活では我々はそれを感じ覚的に分類している。形態の相似とは一致しないが社会に広く浸透する同一性を本稿では「社会通念上同一」と呼ぶ。なお、当該期を含む中国国内でのデザインのコピーについては今井敦『宋・元の青磁・白磁と古瀬戸』日本の美術No.410文化庁2000。
- 5) 本稿では中国の産地問題には言及しない。日本に輸入された中国陶磁の産地については岩手大学平泉文化研究センターを中心としたチームによる研究がある。藪敏裕, 森達也他『貿易陶磁器と東アジアの物流：平泉・博多・中国』岩手大学平泉文化研究センター高志書院2019。考古学的手法と蛍光X線による胎土分析を組み合わせた研究が現在進行形で積み重ねられている。
- 6) SRR『平安京発掘調査報告 左京四条三坊七町・姥柳町遺跡（南蛮寺跡）』関西文化財調査会2014
HKHW『平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-26 財団法人京都市埋蔵文化財研究所2007
HKHX『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所2003
NNS『平安京左京八条三坊八町跡・東本願寺前古墓群』関西文化財調査会 近日刊行予定
- 7) 上川通夫「北宋・遼の成立と日本」岩波講座日本歴史第5巻『古代5』岩波書店2015
- 8) 前掲2) 今井敦2000
- 9) 前掲7)
- 10) 11世紀後半の白磁には器形はY群で胎土や釉の特徴はN群に近いものがある。特に11世紀代のY群直口椀は口縁部から底部まで残っているものの殆どが貫入が目立つY群であった。今後の課題としたい。
- 11) 河北省文物研究所『宣化遼墓1974～1993年考古発掘報告』上・下冊文物出版社2001
- 12) 前掲2) の②
- 13) 前掲2) の①
- 14) 分類当初から、吉川氏と平尾氏に「構造的であるように」と繰り返し念を押された。

表2 各段階の一括資料（1）

段階		遺跡名	出土地点	掲載番号	報告書名	記号
3C	左北 408	左京北辺四坊八町跡	土坑 B1013	54 - 40, 54-41	丸川義広・小松武彦ほか『平安京左京北辺四坊』－第1分冊（公家町形成前）－京都市埋蔵文化財調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所2004	HKGS
3C	左 5309	左京五条三坊九町跡	SE805	35	網伸也・柏田有香『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所2008	HKPS
3C	常・広隆寺	広隆寺旧境内	土坑 22・土坑 183・土坑 189	33	加納敬二『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-4 財団法人京都市埋蔵文化財研究所2010	UZSY
4A	左 2209 ①	左京二条二坊九町跡	高陽院第一整地層	61	網伸也『平安京左京二条二坊・高陽院跡』『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所1999	97HKNF
4A	左 2209 ②	左京二条二坊九町跡	茶褐色砂泥焼土混じり	43～45	平尾政幸『土師器再考』『洛史』研究紀要第12号公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2019 「左京二条二坊（2）」『平安京跡発掘調査概報』京都市文化市民局1982	HKME

表2 各段階の一括資料（2）

段階		遺跡名	出土地点	掲載番号	報告書名	記号
4A	左 2309	左京二条三坊九町跡	SE273	35 ～ 38	平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第 12 号公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 「平安京左京二条三坊九町」『昭和 55 年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011	HKIF
4A	左 4214	左京四条二坊十四町跡	SE1111	182,183	平尾政幸・山口真『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-5 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所	HKHX
4B	左 1306	左京一条三坊六町跡	SE56	31 ～ 33	上村憲章『平安京左京一条三坊六町・旧二条城跡』古代文化調査会 2012	12SIMO
4B	左 4211	左京四条二坊十一町跡	SE1621	30, 31	平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第 12 号公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 「平安京左京四条二坊」『平成 9 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999	HKFF
4B	左 4214	左京四条二坊十四町跡	SE3108	216 ～ 218	平尾政幸・山口真『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-5 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所	HKHX
4B	左 6108	左京六条一坊八町跡	SE16	28 ～ 36	平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第 12 号公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 「左京六条一坊」『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984	HKHK2
4B	左 6305	左京六条三坊五町	土壙 3300	35-54 ～ 57	丸川義広・野芝勉・尾藤徳行・ト田健司『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005	HKWD
4B	左 6308	左京六条三坊八町跡	SE1123	38 ～ 42	平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第 12 号公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 「平安京左京六条三坊」『平成 11 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2002	HKPP
4B		烏丸線No.67	井戸 7	No. 67-49 ～ 51	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980	No.67
4B	常盤①	常盤中之町遺跡	SD140	87・89	高橋潔・加納敬二『常盤中之町遺跡・常盤東ノ古墳群』京都市埋蔵文化財調査報告 2010-15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011	UZJK
4C	左 1212	左京一条二坊十二町跡	井戸 1	59 ～ 65	網伸也『平安京左京一条二坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-18 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003	HKGC
4C	左 2305	左京二条三坊五町跡	SD233 上層・SD233 43・44, 下層	36 ～ 38・43・44, 57・58	『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財発掘調査概報 2001-15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003	HKJJ
4C	左 2309	左京二条三坊九町跡	溝 116	208 ～ 211	小松武彦『平安京左京二条三坊九町・旧二条城跡・烏丸丸太町遺跡』一大門町の調査—古代文化調査会 2016	15H277
4C	左 2410	左京二条四坊十町	2区SK1217	207	『平安京左京二条四坊十町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第 19 冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2001	HKNG
4C	左 3210	左京三条二坊十町跡	池 1570 シルト 1・2	1 2 2・156・157	丸川義弘・東洋一・田中利津子・南出俊彦・加納敬二『平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008	HKMN2
4C	左 3310	左京三条三坊十町跡	落ち込み 118	21・22	柏田有香『平安京左京三条三坊十町跡・烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-20 財団法人京都市埋蔵文化財研究所	HKVM
4C	左 4210	左京四条二坊十町跡	井戸上層	28・29	能芝勉・吉村正親・竜子正彦『左京四条二坊十町』『京都市内遺跡立会調査概報』平成 6 年度 京都市文化観光局 1995	93HL446
4C	左 4304	左京四条三坊四町跡	SG869	47 ～ 51	『平安京左京四条三坊四町・烏丸綾小路遺跡』株式会社日開調査設計コンサルタント文化財調査報告集第 2 集 株式会社ニッセン 株式会社日開調査設計コンサルタント 2007	日開
4C	左 5309	左京五条三坊九町跡	SE4-73	37 ～ 58	平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第 12 号公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 「左京五条三坊 (1)」『昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983	HKCK
4C	左 6308	左京六条三坊八町跡	SD1100	27	平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第 12 号公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 「平安京左京六条三坊」『平成 11 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002	HKPP

表2 各段階の一括資料（3）

段階		遺跡名	出土地点	掲載番号	報告書名	記号
4C	左 8308	左京八条三坊八町跡	SE999	20～25	『平安京左京八条三坊八町跡・東本願寺前古墓群』関西文化財調査会 近日刊行予定	181NNS
4C	左 8308	左京八条三坊八町跡	pit1070	未報告	『平安京左京八条三坊八町跡・東本願寺前古墓群』関西文化財調査会 近日刊行予定	181NNS
4C	左 8316	左京八条三坊十六町跡	SD300	26・27、 30～32	『平安京左京八条三坊』『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994	HKBK
4C	左 9316	左京九条三坊十六町跡	SE69	91	『平安京左京九条三坊十六町』『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011	HKET
4C	左 9403	左京九条四坊三町跡	SD01	52～58	『平安京左京九条四坊三町』『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011	HKKF
4C	嵯	立会太秦6地区	土墳墓 27	132・133	『京都嵯峨野の遺跡』一広域立会調査による遺跡調査報告一 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997	UZZW
4C	仁	仁和寺院家跡	溝 449	41・42	上村和直・山本雅和・太田吉男『仁和寺院家跡（花園宮ノ上町遺跡）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-1 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002	UZOM
4C	尊	尊勝寺跡	SX105		上村和直「尊勝寺跡」『六勝寺跡発掘調査概要』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1981	KSOQ2
4C	常盤①	常盤中之町遺跡	SK538	98・99	高橋潔・加納敬二『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ古墳群』京都市埋蔵文化財調査報告 2010-15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011	UZJK
4C	常盤②	常盤中之町遺跡	溝 290	28・29・ 32	2009-16	UZJK3
4?	左 1306	左京一条三坊六町跡	pit184	34	上村憲章『平安京左京一条三坊六町・旧二条城跡』古代文化調査会 2012	12SIMO
4?	№ 71	№ 71（左京六条三坊十一町・十二町跡）	層	66	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981	烏丸線 № 71
5A	左 3307	左京三条三坊七町	SD167	14・24～ 32	『平安京左京三条三坊七町』『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011	HKCY
5A	左 3309	左京三条三坊九町跡	SE270	31～39	平尾政幸『土師器再考』『洛史』研究紀要第12号公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019『平安京左京三条三坊』『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1994	HKFU
5A	左 3404	左京三条四坊四町跡	井戸 12	1～14	植山茂・山田邦和ほか『高倉宮・曇華院跡第4次調査』平安京跡研究調査報告第18集 財団法人古代学協会 1987	高倉宮
5A	左 4102	左京四条一坊二町跡	池 462・池 288・池 333・ 452	2 2 4・ 3 3 3・ 334・365	『平安京左京四条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2014-10 埋文研 2015	HKSH
△ 5 A	左 4104	左京四条一坊四町跡	SD156	98・99	『平安京跡（左京四条一坊四町）』西近畿文化財調査研究所報告集第3集 西近畿文化財調査研究所 2001	西近畿
5A	左 4214	左京四条二坊十四町跡	SE2469	242～250	平尾政幸・山口真『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-5 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所	HKHX
5A	左 4304	左京四条三坊四町跡	井戸 2	64～66, 79～83, 104～106	『平安京左京四条三坊四町・烏丸綾小路遺跡』株式会社日開調査設計コンサルタント文化財調査報告集第2集 株式会社ニッセン 株式会社日開調査設計コンサルタント 2007	日開
5A	左 5305	左京五条三坊五町跡	SD200	98～123	水谷明子『平安京左京五条三坊五町 烏丸綾小路遺跡』古代文化調査会 2013	12H336
5B	左 5309	左京五条三坊九町跡	SK61	74～77	網伸也・柏田有香『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008	HKPS
5B	左 5310	左京五条三坊十町跡	SK426	62～65	『平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2015-7 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016	HKPV
5A	左 6305	左京六条三坊五町	土壇 3198	37～77～ 79	川川義広・野芝勉・尾藤徳行・ト田健司『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005	HKWD
5A	右 7101	右京七条一坊一町跡	SD23	40～46	平尾政幸・加納敬二『平安京右京七条一坊』『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989	HKSM

表2 各段階の一括資料（4）

段階		遺跡名	出土地点	掲載番号	報告書名	記号
5A	左 830405	左京八条三坊四・五町跡	3区泉 443	14・15	『平安京左京八条三坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009- 7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009	HKBY
5B	左 3404	左京三条四坊四町跡	溝 7	1～5	植山茂・山田邦和ほか『高倉宮・曇華院跡第4次調査』平安京跡研究調査報告第18集 財団法人古代学協会 1987	高倉宮
5B	左 3407	左京三条四坊七町跡	SK220	34～37	平尾政幸『土師器再考』『洛史』研究紀要第12号公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019	SBR
5B	左 6305	左京六条三坊五町	土壙 2444	38-32・33	丸川義広・野芝勉・尾藤徳行・ト田健司『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005	HKWD
5B	左 6308	左京六条三坊八町跡	SE904・SE950	24-44～46, 25-17	平尾政幸『土師器再考』『洛史』研究紀要第12号公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019『平安京左京四六条三坊』『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002	HKPP
5B	№ 61	№ 61（左京六条三坊十四町跡）	暗茶褐色泥砂層Ⅱ	61-52～74	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980	烏丸線 № 61
5B	右 1404	右京一条四坊四町跡	3西区 SK80	1～7	『平安宮左馬寮-朝堂院跡・平安京右京一・二条二-四坊』『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999	HKUX
5B	右 3101	右京三条一坊一町跡	SD100-2	68～73	平尾政幸『土師器再考』『洛史』研究紀要第12号公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019	SOZ
5B	右 6106	右京六条一坊六町跡	SE30	431	（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』2002-6	HKXF18
5B	白河	白河街区	SX91	83～92, 158～167	新田和央『V白河街区』『平成30年度京都市内遺跡発掘調査報告』京都市文化市民局 2019	17S349
5?	№ 74	№ 74（烏丸通・左京八条三坊十六町跡）	土壙 49		『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981	烏丸線 № 74
壺						
	高陽院跡	左京二条二坊九町跡			京都市考古資料館常設展示室	81HKME
	栢ノ杜遺跡				『平安京跡発掘資料選（二）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所財団法人京都市埋蔵文化財研究所編 1986	
	左北辺 301	左京北辺三坊一町跡	土坑 436		鈴木廣司・山本雅和『平安京左京北辺三坊』『平成7年度京都市埋蔵文化財概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996	
	12S260	將軍塚古墳群	土坑墓 1	図 51	宇野隆志『V-3 將軍塚古墳』『京都市内遺跡試掘調査報告平成25年度』京都市文化市民局 2014	

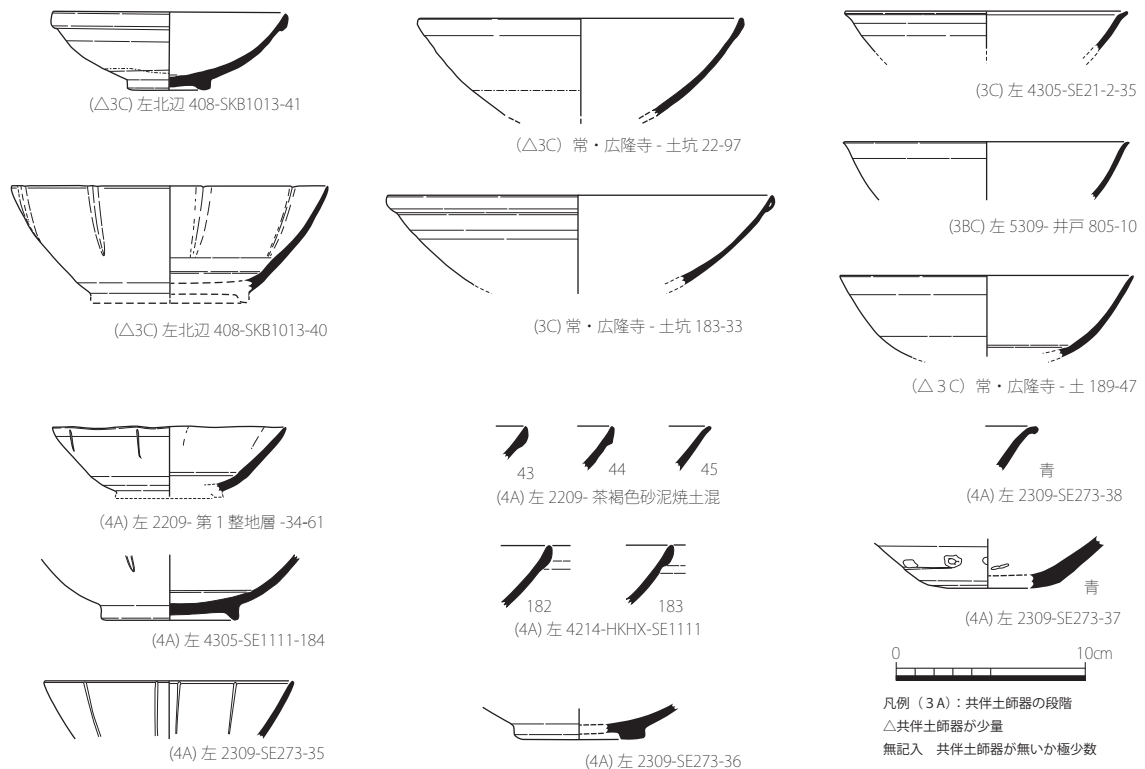
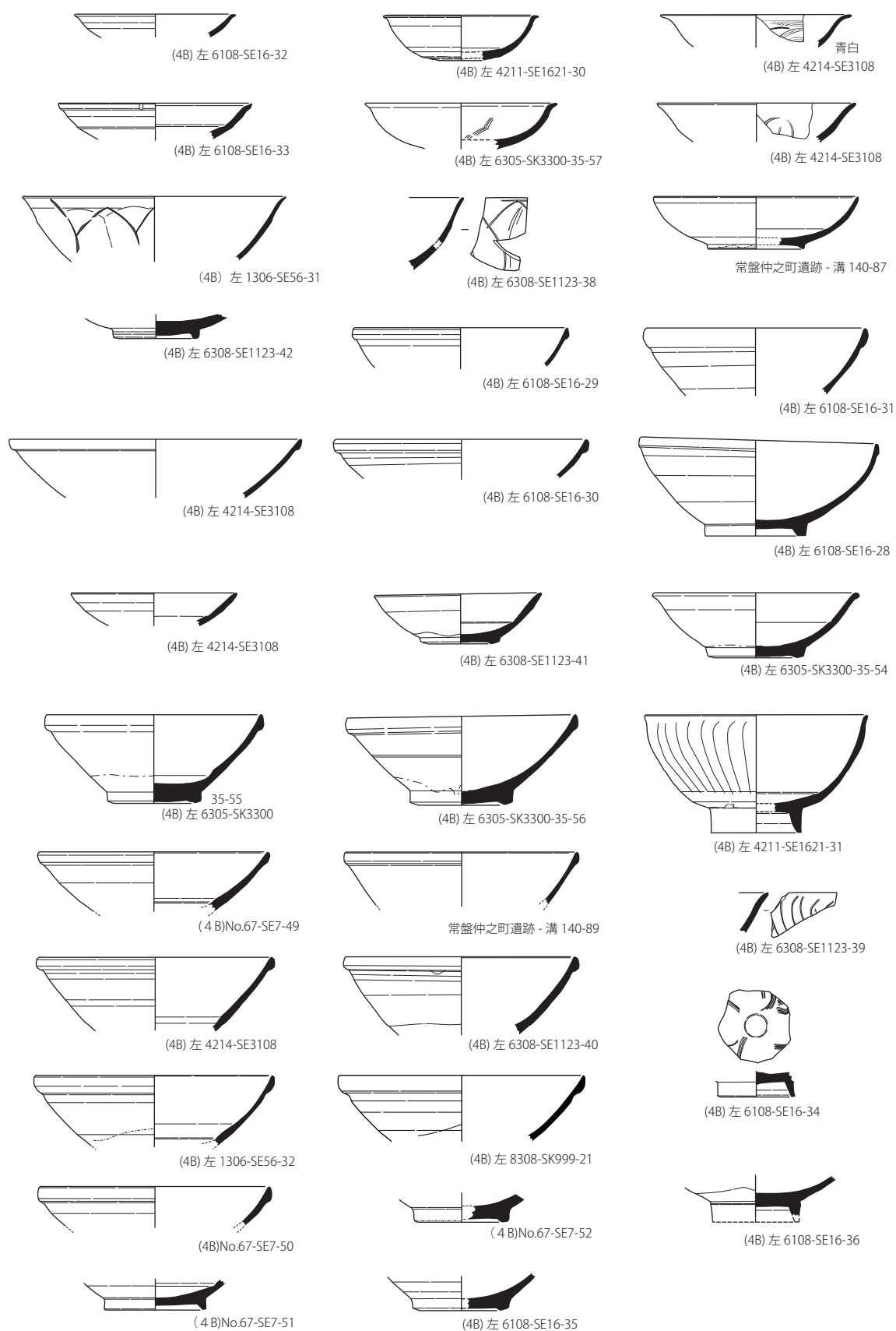


図13 3C・4A段階の輸入陶磁器



0 10cm

図14 4B段階の輸入陶磁器

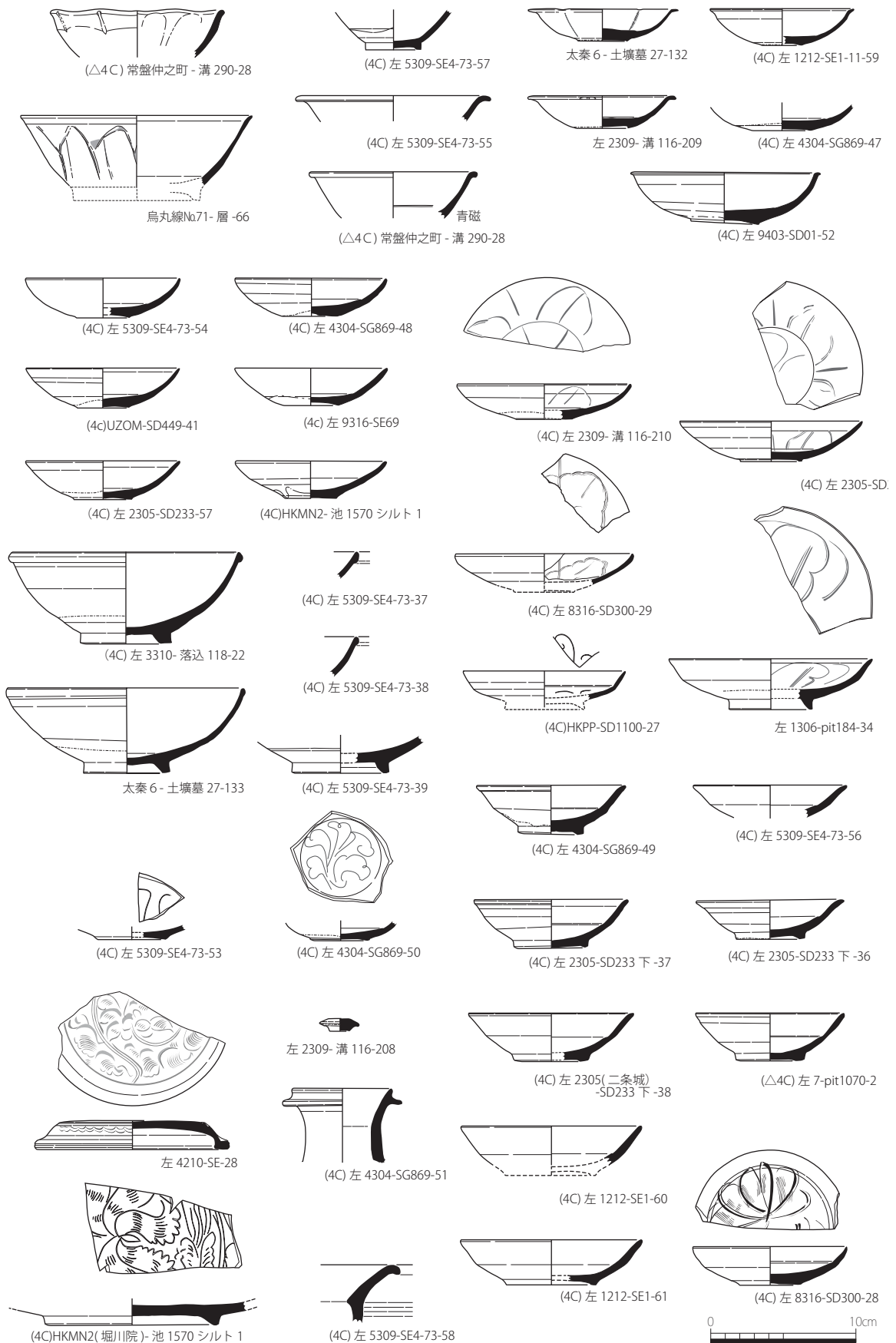


図15 4C段階の輸入陶磁器 (1)



図16 4C段階の輸入陶磁器 (2)

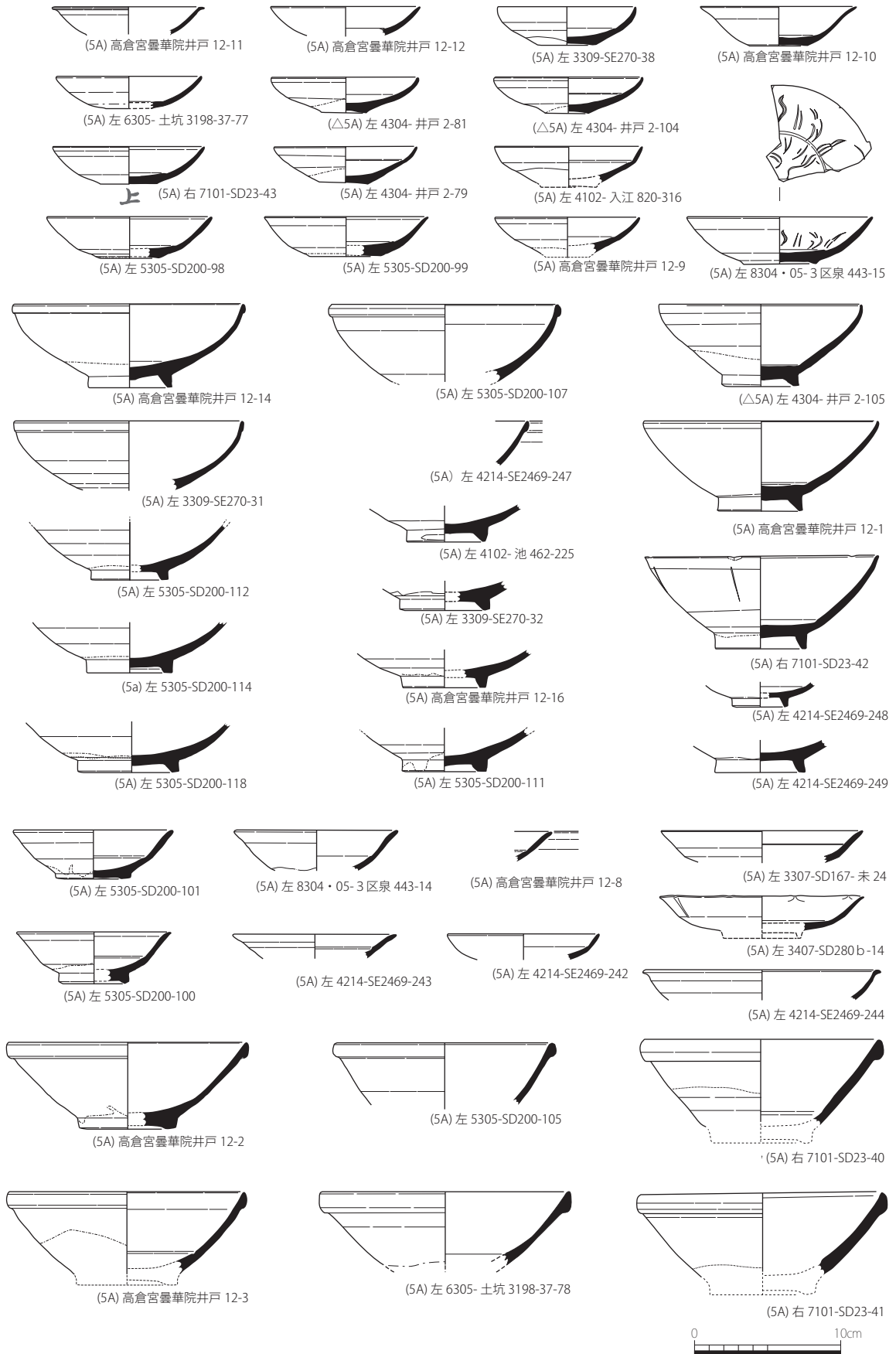


図17 5A段階の輸入陶磁器 (1)

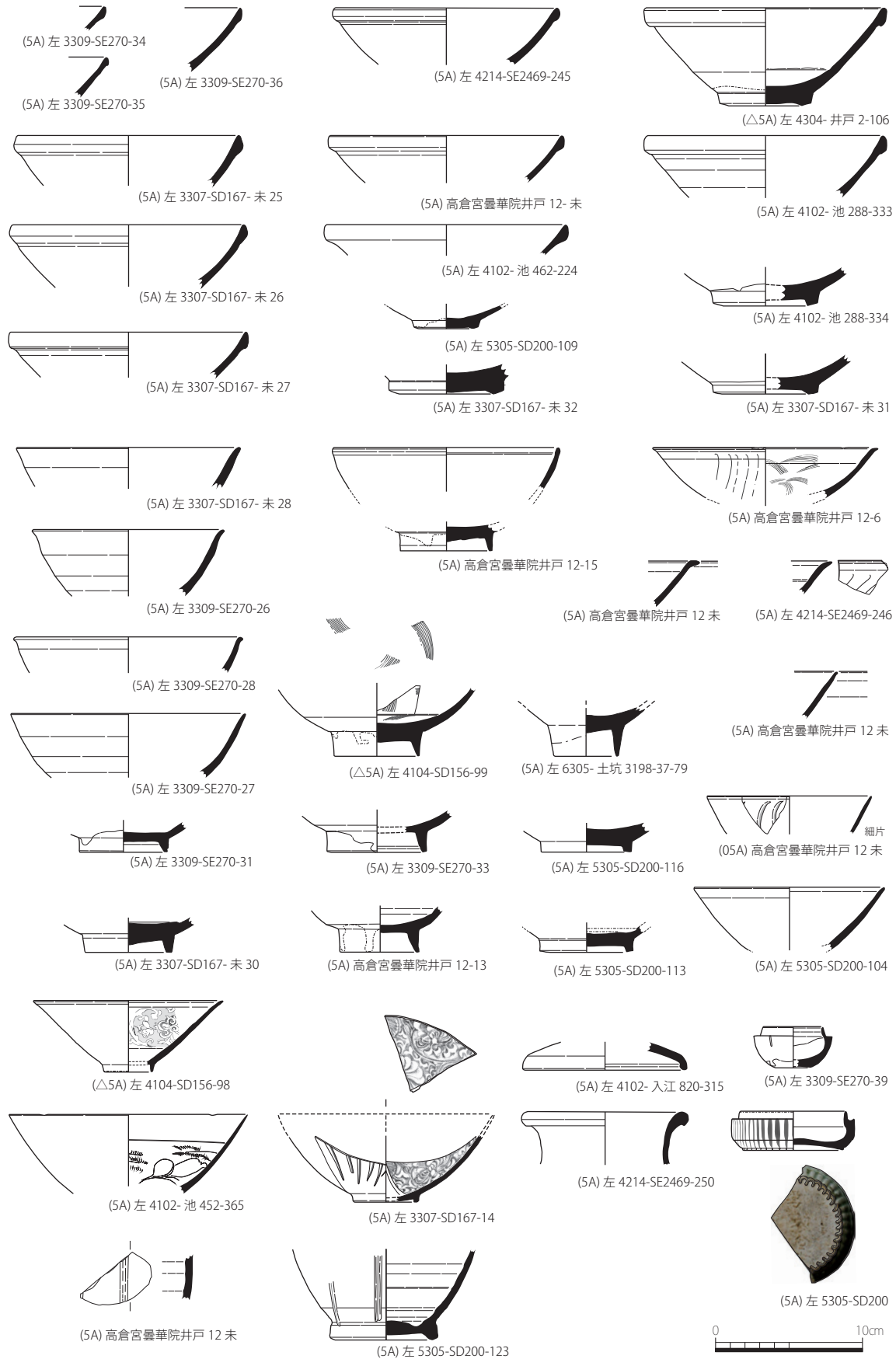


図18 5A段階の輸入陶磁器 (2)

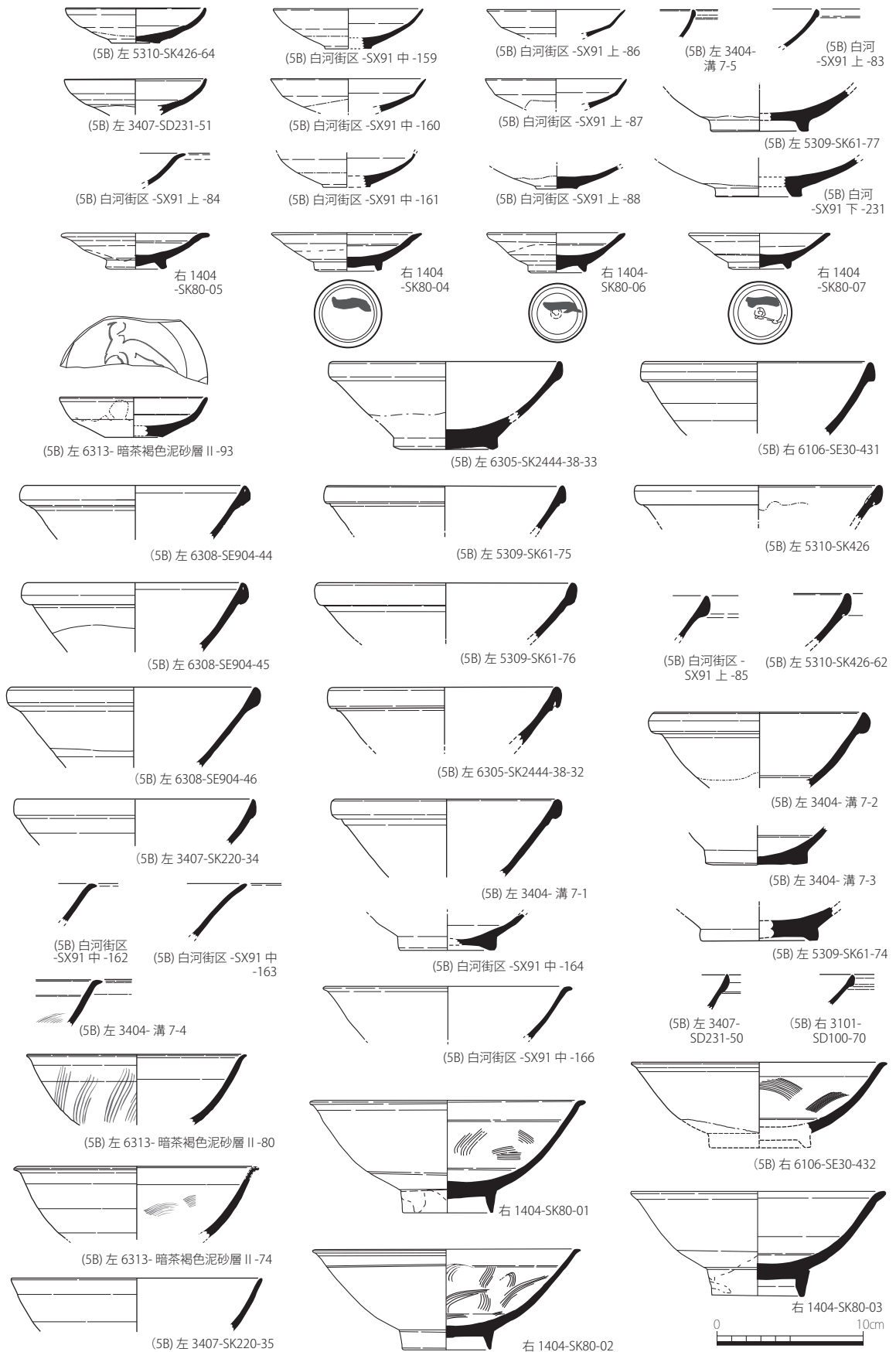


図19 5B段階の輸入陶磁器 (1)



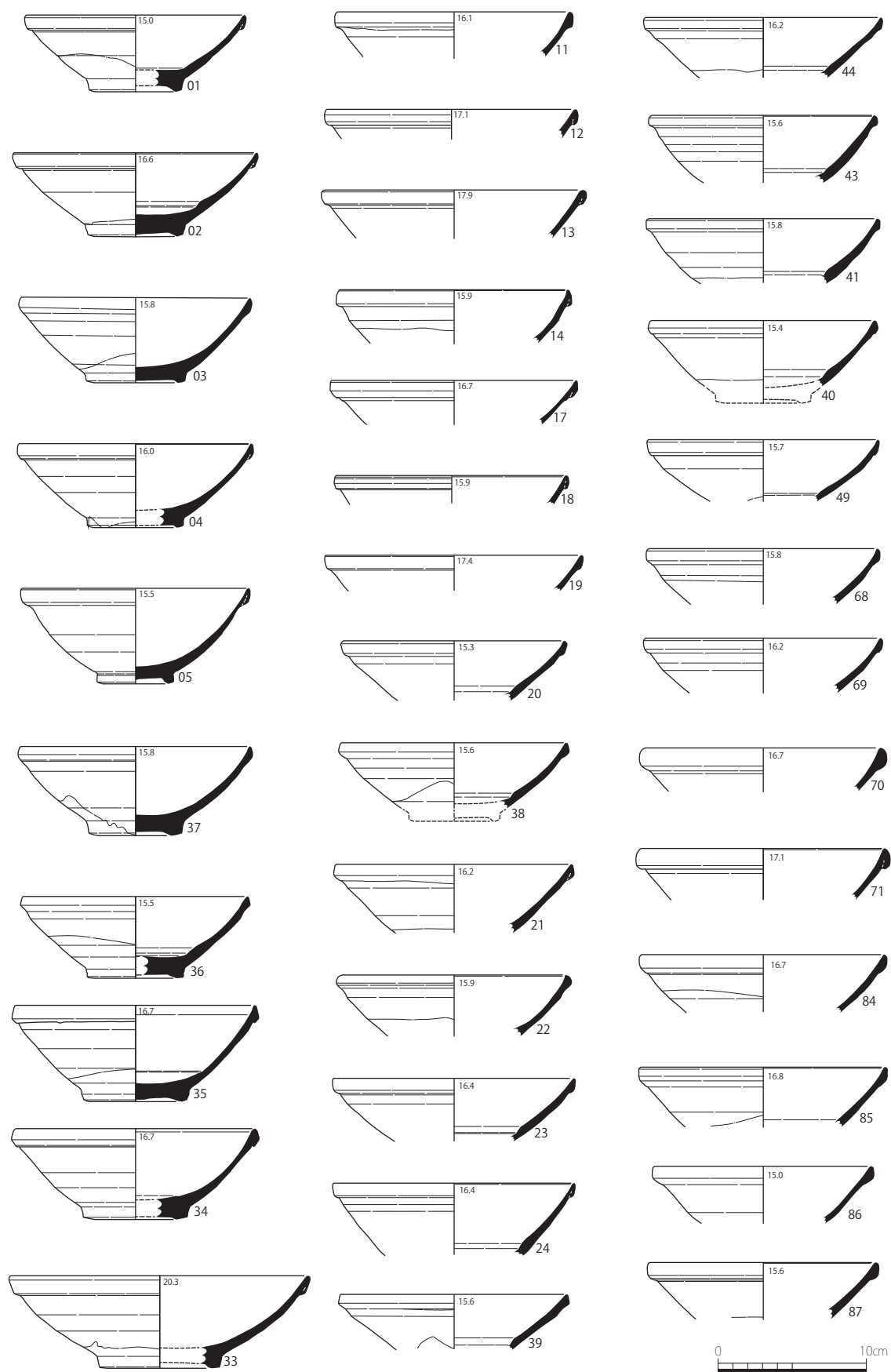


図21 参考_白磁Y群玉縁状口縁碗の個体差 (1) (SRR出土資料を実測。複数時期混ざる1:4)

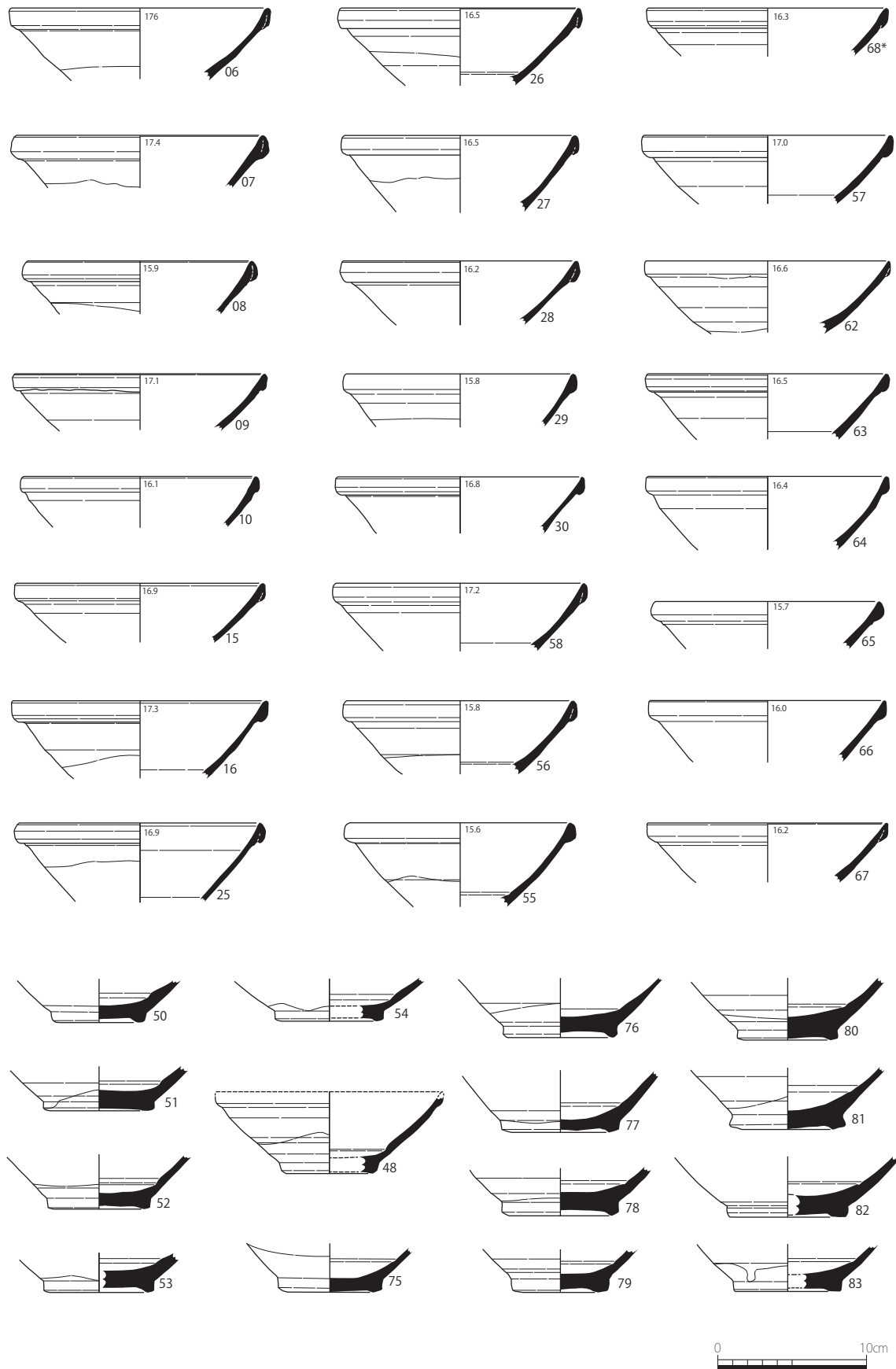


図22 参考__白磁Y群玉縁状口縁碗の個体差（2）（SRR出土資料を実測。複数時期混ざる1：4）